

假名日本紀

卷三

| | | | | |
|---|---|-----|-----|-----|
| | | | | 和書門 |
| | | | 四四六 | 類 |
| | | 三三二 | 六四六 | |
| 三 | 三 | 三 | 六 | |
| 冊 | 架 | 函 | 號 | |

永
完
書
類
二
七
二
號

| | | | | |
|------|----|-----|--|----|
| 庫文開內 | | | | |
| 三七函 | | 四四六 | | 和書 |
| 六架 | 三冊 | 六四六 | | 類 |

| | |
|------|---------|
| 內閣文庫 | |
| 番號 | 和 44646 |
| 冊數 | 3 (3) |
| 函號 | 137 62 |



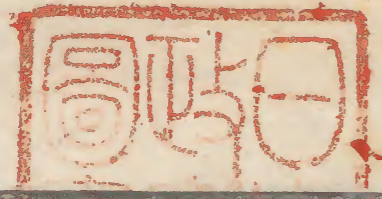
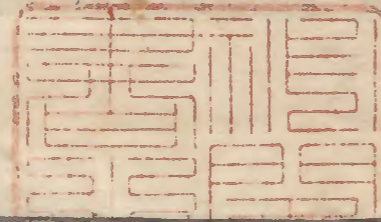
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





假名日本紀卷第三

神日本磐余彦天皇

神武天皇

神日本磐余彦天皇諱ハ彦火々出見彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊ハ第四子なり母と玉依姫と由り海童ハ小女なり

天皇生をなづにいて明達意確如ま年十五ふして立
て木子こあをたふ長多ひて日向國吾田邑乃吾平津媛
と娶て妃とく手研耳命と生々年四十五歳に
諸兄かよび子等にりて曰ハくむう我が

天神高皇產靈尊大日靈尊この豊葦原瑞穂國とのたまふ
擧ての天津祖彦火瓊杵尊にうけけりてに火

たぐまの... 問ての... 我ために導...
 ひや。對てもとさく。導つ... 天皇勅して漁人小雅
 攜乃末と... 執へて皇舟に牽納もて海導
 らん。これら... 名と賜ひて推根津彦と...
 れま... 倭直部ら... 始祖なり行て筑紫國乃菟狹に
 たり... 菟狹の國造祖... 号と菟狹津彦菟狹
 津媛と... 菟狹乃川上に一柱騰宮と...
 て。饗たて... 勅して菟狹津媛と... 侍臣
 天種子命に賜妻之天種子命ハ。これ中臣氏のかつねや
 なり。十有一月丙戌朔甲午天皇筑紫國の崗水門ふつり

たまふ十有二月丙辰朔壬午安藝國... 埃宮
 に... 乙卯年春三月甲寅朔己未... 吉備國に入... 行
 宮と起... 高島宮... 三年...
 間に舟楫と... 兵食と蓄へて... 一擧して天
 下と平... 戊午年春二月丁酉朔丁未皇師ついに東にゆく。舳舻...
 接... 難波乃碕... 奔潮... 太
 急にあひぬ... 浪速國... 三月丁卯朔丙子川

より遡流て徑に河内國の草香邑の青雲乃白肩の津に至
る。夏四月丙申朔甲辰皇師兵と勅て歩より龍田に
至むく。その路せむく嶮くして人並行ふやとえ飲まぬ
る。かへりて。けしに東のう。膳駒山とこえて中洲に入
ら。そこたむ。うに長體彦ういと聞ていこく。それ天神
の子等乃來ま。所以ハ。いめ。むま。に我國と奪らむ。や
すこいひて。それら盡く。小属る兵とたむ。これと孔
舎衛坂みうへ。ぶ架て。與に相戦ふ。流矢の多。五瀬命の眩
脛にあう。けし。皇師進。戦。こ。や。う。ず。天皇憂ひ。う。ふ
ま。か。ら。神策とみ。う。ろ。乃。う。ら。に。運。り。く。曰。く。今。我。ハ

これ日神れ子孫にして。日にむかひて。虜と征ハ。う。れ。天。乃
道にうか。ま。り。退還。て。弱。け。示。して。神祇と禮祭。て。背に
日神の威と負たてま。けりて。影乃ま。に。壓。ひ。蹶。む。ハ。若
ト。如此ハ。ま。か。ら。う。曾。て。又。に。血。ず。虜。必。自。に。敗。む。ハ。僉。曰。さ
く。然。也。こ。う。に。軍。中。に。令。て。曰。く。去。ら。う。く。傳。を。勿。復。進。こ。と。
ま。な。ら。う。軍。を。引。て。還。り。う。虜。ま。う。敢。て。逼。ら。ぬ。却。て。草。香
乃。津。に。至。り。て。盾。と。植。て。為。に。雄。詰。る。因。て。改。り。て。其。津。を。名
づ。け。て。盾。津。と。し。今。蓼。津。と。し。ハ。訛。なり。う。り。孔。舎。衛
の。戦。に。人。り。り。て。大。樹。に。隠。れ。て。難。小。免。る。事。と。得。た。也。乃
て。乃。樹。と。う。り。て。曰。く。恩。母。の。如。し。時。の。人。う。り。て。乃。の。地

と母木の邑ムラこつふ。今飢悶延奇ホノキこつふハ訛あり。五月丙寅
朔癸酉軍人茅渟山城水門ナトにつゝる。山井水門マツノにまづつゝる。瀨余の矢瘡痛イキヤウシキスすいこイキと甚し。もなフルキらスラフ劔乃たフルキらみフルキらフルキ去
りて。雄詰フクケビして曰イハク慨哉大丈夫スラフ小して虜の手をかひ
て。報ウケもして死シなシまシこのコうウ時の人因て其處と号けて雄
水門ミナトこスつス進イて紀伊國の竈山カマヤマ小コいたスたス戸ドすス而五瀬余軍
に薨ぬカサシレりりて竈山に葬フらツ奉ムる。六月乙未朔丁巳軍名草邑
にいたスたスくクもモなラらラ名草戸畔者誅ツミとつツひヒ狭野と越て
熊野神邑クマノカミにつツゝる。もモなラらラ天磐盾アマノイタタテのノほホりて。りりて軍
と引ヒてヒるルやくヤクにニもモとト海ウミ中ナカりて卒ニハカに暴風アラシりりぬ。

皇舟漂蕩ふとに。稻飯命イナヒをカらハちチ歎ナて曰く。嗟乎アワハ祖
ハもモなラらラ天神。母ハ則海神ウミノカミ。いイにニどド我ワと陸ツチにニたタらラふフ
海にたタらラふフやヤ。言イハひヒ訖ツキして。もモなラらラ劔ツルギとト抜ヒキて海に
入イて。劔持神ツルギモチノカミとなナふ。三毛入野命ミモリノカミもモ恨ウラミて曰く。我母ワタシノハハおおららび
姨ハハハ。並ナにニここれ海神ウミノカミなり。いいににど波瀾ナミと起オキて以灌溺スグサやや
いいひひて。則浪券ナミシととりりて。常世トコヨ乃国ノクニ小コいいててままぬ。天皇獨皇
子。手研耳尊テノミミノミコ軍イクサととひひささわわくく進スミて。熊野クマノ乃荒坂津アラガタツ丹敷浦ニシキウラハ小
いたいたたすす。因ユて丹敷戸畔ニシキトととりりつつ。ここにに神毒氣カミドクキと吐ハキ
て。人物ヒトモノここくく小瘁コヅレぬ。これこれにによよりりて皇軍ミコイクサままらら振ふるふふ
ららららびび。ここれれ小彼處コノトコロに人ヒトりり。号ナと熊野クマノ乃高倉下タカクラジととりり。

忽に夜夢うく。天照太神武甕雷神にのりて曰はく。そ
れ葦原中國。たが響喧擾也。宜汝まゝ往て征て。武甕雷神對
て曰く。予行むを雖とも。予が平國之劍と下さば。まふは
ち國まゝに自ら平なせ。天照大神曰く。諾なり。されに武甕
雷神。まふら高倉下に謂ていへく。予の劍と名づく。部
靈とつ。今まゝに汝が庫の裏にたかく。より信く取て
天孫に獻れ。高倉下唯々とすや。こて。寤ぬ。明旦夢の中
乃教ふりて。庫と開てられ。果して落る。劍のり。倒に
庫の底板に立也。まふら取てもて進ぶ。されに天皇より
寐まをり。忽然にして。予先て曰く。予何ぞかく長眠しつる

や尋て毒に中する。士卒もくくにも。醒起ぬ。をてに
て皇師中洲小趣か。せとまれと。嶮絶くして復行む。路な
し。乃接連て。その跋涉む所を知也。時に夜夢見り。曰はく。天照
大神。天皇小訓まつて曰はく。朕今頭八咫鳥と遣を宜し
く以て郷導者とす。果して頭八咫鳥のり。空より翔降
る。天皇曰く。この鳥の来る。自ら小祥夢にうたり。大
哉赫哉。わが皇祖天照大神もて基業とたをけなさせ。こ
えしをる。このに大伴氏の遠祖。日臣命大来目の元
我と督將と。師むく山と。行と啓。ゆきくまふ。は
鳥乃所向行まに。仰て追ふ。つひに菟田の下縣に

たる。よりてそれ至りて、所と号けて、菟田の穿邑と云。
 之に勅ともて、日、臣命とはえて曰、汝忠くして、且、
 加、導、乃、切、り、り、汝もちて、汝、名、と、改、て、道、臣
 とも。秋、八月、甲、午、朔、乙、未、天、皇、兄、猾、及、ひ、身、猾、と、徴、し、む、こ、れ
 二人、ハ、菟、田、縣、の、魁、師、なり。こ、れ、ハ、兄、猾、未、だ、弟、猾、未、だ
 諸、来、り、り、て、軍、門、と、拜、し、て、告、て、曰、さ、く、臣、が、兄、兄、猾
 逆、る、口、ご、と、も、る、状、ハ、天、孫、到、り、ま、さ、ま、さ、し、聞、り、り、て、
 ち、ハ、ち、兵、と、起、し、て、襲、ひ、奉、せ、し、皇、師、の、威、と、望、見、る、に
 敢、敵、は、ま、ど、れ、こ、や、と、懼、て、ち、か、ら、ち、潜、に、そ、れ、兵、と、伏、し、て、
 權、に、新、宮、と、作、り、殿、内、に、機、と、施、て、饗、奉、ら、む、と、し、て、

も、て、作、難、と、ほ、り、を、願、く、ハ、こ、れ、詐、と、知、り、ま、り、て、ち、か、ら、ち、備、へ
 ち、く、天、皇、を、な、ら、ち、道、臣、命、と、遣、し、て、そ、乃、逆、ら、れ、形、と、察、せ
 う、ふ、時、に、道、臣、命、審、み、賊、害、之、心、に、れ、ち、や、と、知、て、大、小、怒、て
 詰、噴、て、曰、く、虜、爾、が、造、り、屋、ハ、爾、自、居、ら、む、と、り、り、て
 劔、乃、た、う、に、取、ま、り、彎、弓、ゆ、り、め、ひ、て、逼、て、催、入、し、む、兄、猾
 罪、を、天、に、獲、た、れ、ハ、辭、し、る、所、な、し、乃、自、機、と、し、て、壓、ハ、れ
 死、ぬ、ら、れ、小、を、れ、屍、と、陳、し、て、ち、れ、と、斬、る、流、る、血、踝、没、つ
 故、の、地、と、名、を、て、菟、田、血、原、と、し、ま、す、に、し、て、身、猾、大
 に、牛、酒、と、設、け、も、て、皇、師、と、勞、饗、を、天、皇、を、乃、酒、と、完、と、も、て
 軍、卒、に、班、賜、し、ち、か、ら、ち、御、謠、し、て、の、ち、ハ、く、

うだのたかきに。あさひなまらぬ。わらゆ律や。あさはなや
瓦受。ひとくも。久ぢくさや理。おなみぢ。あこは依バ。多
らたバの美逆。なまくと。おれ一ひ多。宇佐系繁。なこ
はさだ。伊あさかき。このたほまくと。これ多ひまひ。
あれと来目哥や。今樂府にこれ哥と奏ふ。うたにハ。猶
手量乃大小木。音聲乃巨細あり。是、ふ一への遺行式。
この後に。天皇吉野乃地とみられ。さあや木がして。まふ
ら菟田。穿邑より。こづう。輕兵と率わく。巡幸す。吉野
につり。あふ。これに人あをて。井の中より出り。光にて
尾りり。天皇問ての。あはく。汝ハ何人ぞ。對てまとさく。臣

ハ。これ國神なり。名と井光と。吉野乃首
部。始祖なり。更少く進ふ。うたに。あはく。尾りり。而して
磐石と披て出る者り。天皇問て曰ハく。汝ハ何人ぞ對て
曰さく。臣ハ是磐排別が子なり。これをなまら。吉野乃國標
部の始祖なり。水小縁て西に行に。おらびてま。梁と作て。
魚と取る者り。天皇問て曰く。汝ハ何人ぞ對て曰さく。臣
ハ。是芭苴搭が子なり。此則阿太養鷗部が。これ祖なり。
九月甲子朔戊辰。天皇菟田の。高倉山。其巔にの。おらして
域の中と。瞻望した。うたに。これに國見丘。上にまふら。ハ十
梟師あり。ゆら女坂に女軍と。おら。男坂に男軍と。おら。墨坂

に焔炭と木を。それ女坂。男坂。墨坂乃号ハ。こゝ小とて木
 こり也。まゝ兄磯城の軍ありて。磐余邑に布満あり。賊虜ど
 の處こころ。皆これ要害之地なり。故道路絶ふこづり。通
 ゆるこころなり。天皇悪みこふ。是夜にけううけひて
 寝ませ也。夢に玉ハく。天神ありて訓ませ也。曰ハく。うべ。
 天香山乃社の中の土と取て以て。天平瓮八十枚とけく也。
 并小嚴瓮とつくりて。天神地祇と敬ひ祭ふべし。まゝ嚴乃
 呪詛とせよ。如此せば。則虜木のつづくに平伏あさぐいふ
 也。天皇けうくみて。夢の訓じやをうけたるハ。已たまひて。
 りりて以て木こふいふ。これ小弟猾まゝ奏して曰さく。

倭國乃磯城れ邑小。磯城乃八十梟師あり。高尾張乃邑
 に赤銅の八十梟師あり。こ乃類こ。天皇こみせ。戦ハせ
 じ欲也。臣竊に天皇力にために憂へたて。月つゆ。今まさに
 天香山の埴と取て。もて天平瓮とけりて。而して天社國
 社之神と祭たふへし。然してのち虜と撃たすつ。まか
 いち除ひ安きせこつ。天皇もてあて。夢れ辭ともてよ
 此兆とこり。弟猾の言くと聞し。ゆにたよびて。まは
 けし懐に喜びふ。まかろ。推根津彦をして。弊をる衣服
 及蓑笠とさせ。老人乃貌にけり。まゝ弟猾をして。箕と
 させて。老婆のをつ。になりて。去りて。勅してのた。月ハ

くう海一く汝たり二人。天香山に到て。いとかにそ乃巖乃
土とら驚く來旋れ。基業の成む否ハ。まさには汝うらとして
山にせ覺。努力慎一ウ。是らにハ虜れ兵大路にハみて。以
て往還。うら。時に推根津彦もかハち祈ひてハハく我皇
當にうくこれ國と定りうら。べさめらバ。行そ路木のづら
ら。通れも一能らハ賊うら。防が覺。つひ訖てたづら
に去らにハ群虜二人と見て。大く咲て曰く。らね醜くや。老
父老姬もかハち相こせに道と闢てゆら。覺。二人と乃山
にうらね。こせと得て。土とこせて來歸ら。うら。に天皇甚
に悦びうら。はて。まねら。これ埴をもて。八十平瓮。天手抉ハ

十枚嚴瓮と造作ら。まふ。まら。て丹生の川上へのなり
て。用て天神地祇と祭まね。うら。にまかハちか乃菟田川
乃。朝原にた。ハ水沫の如く。に。て咒著所ら。天皇上
目てま。祈之て曰く。吾今ま。に。八十平瓮をもて水なり
に。て。飴と造らむ。飴成らハまねら。吾うら。ず鋒刃之
威と假まて。坐な。うら。天下と平む。まかハち飴と造り
飴もかハち自成ぬ。ま。祈て曰く。吾今ゆ。に。嚴瓮と
丹生之川に沈り。ま。魚大小。く。醉て流れ。ま。
譬ハ猶披の葉れ。浮流。うら。く。あ。吾うら。す。
の國と定りて。ま。も。色雨ら。ハ。終て成れる所ら。ま。

大室と。忍坂邑に作^ツして。さつりに宴饗と設^セけて。虜と誘^ユて
 取^トとのうふ。道臣命^{ミチノミコノミコト}に密^シ乃^ノかや^カ旨^シと奉^{ホウ}て。審^シと忍坂
 には^ニ在^リる。而^{シテ}我^ガ猛^{マウ}卒^{ソウ}と選^{セン}て。虜^ロと雜^ソ居^クて。ひそくに期^キて曰^{ハク}
 く。酒^{サケ}酣^{ハム}乃^ノのら^ラ小^コ。吾^ガもか^カら^ラ起^キて歌^{ウタ}ハ^ハ。汝^ニ等^ノ乃^ノが^ガ哥^カ乃^ノこ
 ると聞^クハ。一^{ヒト}時^{トキ}に虜^ロと^トせ。も^モで^デに^ニ居^ルあ^アつ^ツまり^リて。酒
 行^{ユキ}も。虜^ロ我^ガ小^コ陰^{イン}謀^{ボウ}あ^アら^ラず^ズ。情^{コト}乃^ノま^マに^ニや^ヤい^イま^マに。
 醉^ヱぬ。これ小^コ道^{ダウ}臣^シ命^{ノミコト}もか^カは^ハら^ラ起^キて^テこれと歌^{ウタ}て曰^{ハク}。
 とさ^サう^ウれ。た^タら^ラむ^ムろ^ロを^オに。ひ^ヒこ^コめ^メに。い^イま^マと^トり^リこ^コえ。ひ^ヒや
 さ^サに。き^キい^イま^マと^トり^リこ^コえ。い^イま^マと^トり^リこ^コえ。い^イま^マと^トり^リこ^コえ。い^イま^マと^トり^リこ^コえ。
 けい。い^イま^マと^トり^リこ^コえ。い^イま^マと^トり^リこ^コえ。い^イま^マと^トり^リこ^コえ。い^イま^マと^トり^リこ^コえ。

これに我^ガ卒^{ソウ}歌^カと^トう^ウて。こ^コに^ニそ^ソれ^レ頭^{カブ}推^ツ劔^ツと^トぬ^ヌて一^{ヒト}時^{トキ}
 に虜^ロと^トら^ラむ^ムつ。ま^マの^ノら^ラれ^レ者^{モノ}か^カら^ラ皇^{ミコ}軍^ツ大^{ダイ}に^ニ悦^{ユキ}び^ビて。天^{アメ}と
 仰^{ホウ}ぎ^ギて^テ笑^{ワラ}ふ。因^ユて^テ歌^{ウタ}て^テ曰^{ハク}。
 い^イま^マと^トり^リこ^コえ。い^イま^マと^トり^リこ^コえ。い^イま^マと^トり^リこ^コえ。い^イま^マと^トり^リこ^コえ。
 た^タら^ラむ^ムあ^アこ^コよ。
 今^{イマ}来^キ目^メ部^ブう^ウ歌^カひ^ヒて。後^{ノチ}に^ニ大^{ダイ}と^トら^ラむ^ムハ。こ^コれ^レ乃^ノ縁^{キリ}あり。又
 歌^{ウタ}之^ノ曰^{ハク}く。
 え^エみ^ミい^イま^マと^トり^リこ^コえ。い^イま^マと^トり^リこ^コえ。い^イま^マと^トり^リこ^コえ。い^イま^マと^トり^リこ^コえ。
 え^エき^キず。
 これ^レに^ニ密^シ旨^シを^オう^ウけ^ケて^テ歌^{ウタ}う^ウて。敢^{カウ}て^テ自^ジ専^{セン}なる^ルに^ニあ^アら^ラず。

され小天皇曰く。戦勝て驕はるやめさハ。良將乃行あり。今
 魁賊を小滅て。同く悪者匈匈十數羣しりり。その情
 知たうも。如何ぞ。久く一處に居て以て。こかむじやまれ
 事無りし。云てもかいら。營と別處小徒たまふ。十有一月
 癸亥朔己巳皇師大よこりて。將に磯城彦と攻すとも。先
 使者と遣して。兄磯城と徴しむ。兄磯城命と受けむ。うに
 頭八咫鳥と遣して。之と徴す。時に鳥其營にいつて鳴て
 曰く。天神の子。汝と召も。怡莽過怡莽過。兄磯城いうて曰
 く。天壓神至まんと聞て。吾が慨憤有り。有る時に。いかにぞ
 鳥乃鳥かくあしくはなくやと。いつてをかいら弓彎ゆる

るひて射ゆ。鳥をかいら。避去ぬ。次小身磯城が宅にいつて
 て。鳴て曰く。天神乃子。汝と召も。怡莽過怡莽過。時に身磯城
 慄然改容て曰く。臣天壓神。至まんと聞て。旦夕畏懼は善う
 な。鳥。汝の如此鳴くやと云て。をかいら葉盤八枚とつくり
 て。食物と盛て饗之。因て以て鳥乃まに詣到て。告して曰。
 かく。吾が兄磯城。天神乃みに来まんと聞て。をかいら
 八十梟師と聚り。兵甲とをひて。まさにも興戦うしやらん。
 早に圖る。いかに。へいこまらん。天皇をかいら諸將とつどへ
 て。問て曰はく。今兄磯城しりて。逆賊之意あり。召まに
 こ亦まぬ来ど。されと為さるや。如何諸將へいこ。兄磯城ハ

黠^{サト}賊^クなり。宜^{タカ}まづ弟磯城と遣^{ツカ}して。ふんと曉^{ササ}諭^サし。并^ツで兄倉下弟倉下と説^{カト}こし。遂^ツに歸^{マツ}順^ハず。然^{シテ}して後兵と擧^ゲて臨^シ之^{コト}。まゝ晚^{オク}か。まかハち弟磯城として。利害と開^キ示^シし。而^{シテ}は兄磯城等な不^{オロカ}愚^カなる謀^{ハカ}と守^マりて。肯^ノて承^シ伏^セせど。推根津彦計^{タベカリ}之^テ曰^{ハク}。今^{イマ}ハうべまけ我女軍と遣^シして。忍坂の道より出^デさば。虜^{ウラ}らしを見てうめ^ムど銳^イ兵^ヘと盡^スして。赴^ムむ。され則^{スレバ}勁^{コキ}卒^{イサ}と駈^セ馳^セて。たゞち小墨坂と指^{サシ}て。菟田川水とよりて以^テ。その炭火^{コウシ}に灌^ツぎ。儻^イ忽^ラ之間^ノ。其不^{オモ}意^シに出^デば。まかハち破^クとせ^スく必^キあり。天皇^ニの策^{ハカ}と不^{オモ}意^シく。まかハち女軍と出^シして。もてこせしめ

ら。虜^{ウラ}大^イ兵^ヘを^シて。至^リふや謂^イひて。カと畢^ツして相待^{マツ}。これよ。先^ニに。皇軍攻^ムて必^キ取^ルべ。戦^ハひて必^キ勝^ルべ。而^{シテ}は外^イ曾^ク之^ノ士^シ。疲^ツ弊^ヒる事^{コト}無^クに。故^ニに聊^イに御^ミ謠^{ウタ}と為^スりて。以^テ將^イ卒^{ソウ}も^シの心を慰^{ナグ}め。謠^{ウタ}しての^ノハく。たゞなえて。いふ乃^ハや。此^ノのゆゆ。いゆにまゝ。い。ま^ハかへ。お。後^ノハや。あ。ぬ。志^シ。月^{ツキ}津^ツを。架^カう。か。ひ。が。こ。こ。い。月^{ツキ}を。け。お。ら。ね。末^ハ。今^{イマ}。助^{タケ}。て。男^{オト}軍^ツと。も。て。墨^{スミ}坂^{サカ}と。越^ユて。後^ノより。ま。み。う。り。て。破^クる。その。梟^{ヒトコノカミ}師^シ。兄^ニ磯^{イソ}城^{シロ}等^ト。こ。ろ。一^ツ。十^シ有^ハ。二^ニ月^{ツキ}癸^ミ巳^シ朔^{ツキ}丙^{ヘイ}申^シ皇^{ミコ}師^シ。つ。ひ。に。長^{ナガ}髓^{スミ}彦^{ヒコ}と。う。り。連^ヒ戦^{ケン}ひ。て。勝^{カツ}つ。や。あ。ら。ま。ず。ら。れ。よ

忽然に天陰^{ソラクモ}して雨氷^{ヒサメ}ふれ。もかゝら金色^{コガネ}の靈鷲^{リョウジウ}あり。とび
 來^キて皇弓^{ミヤユミ}の弭^ヒに止^{トモ}り。その鷓^{ヒカリカ}光曄^{カク}煜^{ヤク}形^{カタ}く流雷^{イチナヒ}の心
 ぞ。是^{コト}小由^{コトヨ}て長髓^{チカヅメ}彦^{ヒコ}の軍^{イクサノセト}壘^{ツツ}じも。こな迷眩^{マドレミキ}て。まゝ力^{キバメ}戰^{タケ}ハ
 ぞ。長髓^{チカヅメ}ハ是^{コレ}邑^{ムラ}乃^ノ本号^{モトノナ}なり。因^ユてまゝもて人^{ヒト}の名^ナこも。皇軍^{ミヤイクサ}
 乃^ノ鷓^{ヒカリカ}の瑞^{シズメ}と得^{ウケ}るよ及び^{及び}て。時^{トキ}の人^{ヒト}よりて鷓^{ヒカリカ}邑^{ムラ}こなつく。今
 鳥^{トリ}見^ミこ云^{イハ}々^々訛^シをる也。むく孔^ク舍^サ衙^カ乃^ノ戰^{タケ}小^コ。五瀨^{イツノ}命^{ノミ}矢^ヤに中^{ナカ}
 て薨^{カクシ}す。天皇^{ミカド}これと銜^{フミ}もちりて。常^{トコ}小憤^{コイタ}之^ノ懟^{ウラ}むくことと
 懷^{イダ}さるふ。この役^{ウヂ}に至^イる。意^{ココロ}に窮^{キハメ}誅^{コロ}さむとわやして。まか
 ら御謠^{ミウタヨミ}して曰^{イハ}く。
 み却^シこつ。久米^{クメ}ふあうが。かきこに。あはふにハ。かこ
 垣^{カキ}本^ホ

既^イハを母^{ハハ}こ。そ乃^{ソノ}も也。そ祢^ネりになだて。うちて一^{ヒト}分^{ブン}復^{フク}
 む。

まの謠して曰く。

三^ミに美^ミはし。久米^{クメ}れあうが。うれこに。うゑくも
 くちひく。これハも後^{ノチ}む。うらてしやまを
 ちりてまゝ兵^{イハ}と縦^{タテ}て忽^{ニガ}に政^{セム}たまふ。まぐてこの御謠^{ミウタ}ハこ
 な來^キ目^メ歌^カじつ。これハ的^セて哥^カへはもれと取^{トル}て。名^ナつけ
 るあり。これに長髓^{チカヅメ}彦^{ヒコ}をかハち。行人^{ツカヒ}を遣^{マタ}して。天皇^{ミカド}にまを
 して曰^{イハ}さく。常^{トコ}天神^{アメノカミ}の子^コまゝく。天磐^{アメノイハ}船^{フネ}にのりて天^{アメ}より
 降^{クダ}り止^{トド}ませ。名^ナづけて櫛^シ玉^{タマ}鏡^{カガミ}速^{ハヤ}日^ヒ命^{ノミ}こまを。こまわか

妹三炊屋姫まのなまハ長髓姫と娶てつひに児とす
む。名と可美真手命たの名ハ鳥見屋姫とす。故小吾饒速日命と以て君と
りて奉まつゆ。と礼天神乃子ミコノアヒ。豈兩種ニウツクもさや。如何イカニぞう
に天神の子と稱す。以て人地ヒトツチを奪ウバひや。吾心ミココロ小推オシらうり
見るに必信カナラシありむ。天皇曰く。天神乃子多小オホあり。汝が君也
まの所是實マコト小天神の子あり。ハ。必表物シラベモノありむ。相示アヒシせよ。長
髓彦即ち饒速日命乃。天羽羽矢ヤマト一隻ヒトツツにさび歩カキユキ鞞ツツとありて。
以て天皇に示せたてまつり。天皇こぞかゝりてゆユひや。か
りまマ祭マツルこのコノいイまマひヒて。還て所御天羽々矢マカセル一隻ヒトツツにさび歩カキユキ
と長髓彦に示せたマふ。長髓彦乃天表アマツヒとヒて。まマくク踏フミ

踏フミまマれレこコやヤと懐ウツクく。あアりリて凶器ツバモノをモてテに構カマへテ。その勢イキホひ
中休ナカユにニさサまマくクと得ユび。而シカレて猶迷ユへル圖ハカリと守モりて。復改マタる
意ココロなく。饒速日命もモこコろロ。天神慇懃ネムコロにニさサまマふフハ。たタゞ天孫
是コトにニさサまマふフ玉タマとト知チり。且ナらラ長髓彦乃稟ヒト
性サマシ悞モロて教シふルに。天人アメノミコ之際ノトキと以てモさサまマふフと
見て。さサかカはハらラむムと殺コロして。その衆モロを帥モウて帰カヘ順ノボふ。天皇も
こコろロ饒速日命ハ。これ天より降クダりリこコろロと聞キく
めメせり。而シカレて今果イマして忠効チウキウと立タちチて。さサかカはハちチ襲ホメてシ罷シ
ふ。これ物部氏乃遠祖あり。
己未年春二月壬辰朔辛亥諸將に命ミコトをモらラ分ワケて。士卒イハサと練シふ。

これらに層富縣波多丘岬に新城戸畔こつものりり。
まゝ和珥乃坂本に居勢祝とつもの者りり。臍見乃長柄乃五
岬に猪祝と云ものりり。此三処の土蜘蛛並ふ。その勇力と
特て來庭肯ハど。天皇乃偏師と分ち遣て。こひ誅うめた
まふ。まゝ高尾張邑に土蜘蛛りり。その人こなり身短く
て手足ハ長し。侏儒と相類たり。皇軍葛網と結て。ねとひ殺
しつ。よりて改めてそ乃邑を号けて。葛城と云。夫磐余之地舊
乃名ハ片居まゝハ片立とつもの。我が皇師乃虜とあつた
にらびて。大軍を集ひて。そ乃地に満り。よりて改り
号けて磐余と云。或こく。天皇らに嚴寃の糧と嘗り

て軍と出して西征す。このらに礮城乃八十梟師とこ
に屯聚居たり。果して。天皇と大き小戦ふ。つひ小皇師の為
に滅りぬ。故名づけて磐余邑とつもの。まゝ皇師立詰り處
と。是と猛田と云ふ。城作る所とたげちて城田と云ふ。まゝ
賊衆戦死て屍と僵し。臂と枕にせし處と呼て。頬枕田と云。
天皇前年の秋九月と以て。潜に香山之埴土を取て。以て八
十平尾と作りて。躬自齋戒して。諸神と祭り。つひに區
宇と安定とと得り。故土と取り處と号けて。埴安と云。
ふ。三月辛酉朔丁卯令と下して曰く。我東と征り。こ
に六年にりぬ。皇天の威と頼り。凶徒こ消りぬ。邊土

いさゝ清まらぬ餘のさうひひかかあもる事といへとも
中洲之地にまゝ風塵なりまゝに宜しく皇都と扱め瘠
大壯とすめつづくべし。而るを今運こ乃屯蒙にあひ
民心朴素なり。巢に棲み穴に住む去口ぞ。これ常におれり。
それ大人制を立て。義ありきも時に随がよ。いざしくを民
に利らしむ。何ぞ聖乃まごに妨はせ。且まゝに山林をひく
にろくひ。宮室と經營もく。つゝみて寶位に臨こもて元
元とまねむる。上はまかろ。天の神れ国とすれきり。
徳に。さへ下はまれら。皇孫正しれを養ひり。心と弘
りし。然して後に。六合と兼て。もて都とひく。八紘と掩ひ

て守こせむら。亦可めらむ。観バうれ畝傍山の東南極
原之地ハ。けだ一國之奥區なり。治るこ乃月に。即有司
に命て帝宅と經始む。庚申年秋八月癸丑。朔戊辰。天皇ま
に正妃と立むとも。改りて廣く華胄と求めり。時に人
て奏て曰さく。事代主神三島溝楯耳神乃女。玉櫛姫小共
して。所生うへは児号と。媛踏鞬五十鈴媛命と曰と。これ国
色之秀うれ者なり。天皇悦びり。九月壬午朔己巳。媛踏鞬
五十鈴媛命と。納て以て。正妃とす。辛酉年春正月
庚辰朔。天皇極原宮に。即帝位と是歳と。天皇乃元年となす
正妃と尊ひて。皇后とす。皇子神八井耳命。神湊名川

小野榛原下小野榛原こつふもて皇祖乃天神と祭る。三十有一年夏四月乙酉朔皇輿巡幸まゝりて腋上喉間丘に登りて國の状と廻望る。曰ハク妍哉國をえつ。内木綿之真逆國こへへじも猶蜻蛉の醫占せほ如くもらふり也。是に由てまゝりて秋津島乃名あり伊弉諾尊この國を号つけて曰ハク日本者浦安國細戈千足國磯輪上秀真國も大己貴神これと目てのつらハク玉牆の内國饒速日命乃天磐船にのりて大虚とゆふてこの郷を睨てあふくたむふ。至ゆに及びて故因てこれと目て虚空見日本國とる。

四十有二年春正月壬子朔甲寅皇子神渟名川耳尊と立て皇太子こりる。

七十有六年春三月甲午朔甲辰天皇檀原宮に崩すぬ。此に年一百二十七歳明年秋九月乙卯朔丙寅畝傍山乃東北陵に葬すつゆ。

假名日本紀第三終

御本云

日本書紀歷代之古史也。元正天皇養老年中
一品舍人親王太朝臣安麻呂奉勅撰之。吾朝
撰書迄。奏覽以是為權輿者耶。君臣共以莫不
窮此書矣。按應神天皇以還。至繼體天皇御
宇。異域典經多以雖來朝不解其義。徒經三百有
餘歲矣。推古天皇御宇。聖德太子察三才之源
達三國之起。故始以漢字附神代之文字。傍於子
爰。吾邦人浸得識量典經之旨。非至聖誰敢成此
緯哉。蓋神道者為萬法之根。抵儒教者為枝葉。佛

教者為花實彼二教者皆是神道之末葉也雅以
技葉顯其本原然則異曲同工者歟頃學儒佛者
影而知神書者鮮矣物有本末事有終始何棄本
取末焉於神國爭疏神書乎萬幾之政尚以神事
為最第一但神代事理既幽微非理不通欽惟
陛下寬惠叡智之餘後世惜其流布之不廣遂命鴉
工於是始壽諸梓矣舊本頗純駁不一求數本考
正之去其駁而錄其純用之國而及之天下則以
成熙皞之治以紹神尊之統保瑞穗之地千五百
秋將必有賴於斯焉

慶長己亥姑洗吉辰

正四位下行少納言兼侍從臣清原朝臣國賢敬識

大の日本紀を少幼て清原のありし國資卿の假名書
法所奉山田所持の可世にたふし清原のありし
まゝ一部として後世に残りぬる予にあま
うはうしむれ者年素筆のありしといふものぞ
美にあらがひ全部三十卷紙は千百九十三丁一字れりや
す祭をたゞしてまゝに享保戌の春書しけりといふぬ
よし人手ぬのたにうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
勝

享保三戌のゝ

初春上旬

秦氏末流

香河景号書寫

明治七年十一月十五日官許
同 八年八月發兌

山岸氏藏版

岐阜縣下

東崖堂發兌

書肆

